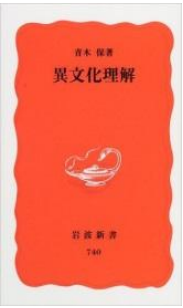
2027 年度合格者への推薦図書

＊入学が早目に決まったみなさんは、じっさいに入学する４月まで、時間に余裕があります。そのあいだに、自分が関心をもつテーマを扱った、社会科学関連の書籍を自主的に探して読んでおくと入学してからが楽になります。現代社会学科の先生方におすすめの本はありますかと尋ねたところ、それぞれのスタッフが一冊を紹介してくれました。興味をもてそうな本があったら、是非チャレンジしてみてください。感想文の提出は不要です。（学科長　平田由紀江）

現代社会学科教員からのおすすめ

☆青木保『異文化理解』岩波新書、２００１年



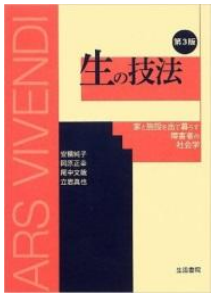
グローバル化が進み人・モノ・情報の移動が速く広くなった今、「文化」は重要な言葉です。「文化」を通して、身近な場所から遠い場所までつないで考えてみましょう。

☆伊藤守『テレビは原発事故をどう伝えたのか』平凡社新書、２０１２年



2011 年３月 11 日から一週間の原発報道を検証しています。社会においてテレビとは、そしてテレビ報道の役割とは何かについて考えてみましょう。

☆安積純子・岡原正幸・尾中文哉・立岩真也『生の技法――家と施設を出て暮らす障害者の社会学』生活書院文庫、２０１２年



ある女性障害者の波乱万丈人生と、それを出発点とした社会学の思考。アメリカ、アジアへの展開も含む。

☆佐藤卓己『流言のメディア史』岩波新書、２０１９年



メディア・リテラシーとは何か。その本質を、日本の現代史から掘り起こす。デジタル情報化時代のいまこそ、批判的的思考力を歴史のなかから探り当てる。

☆本田由紀『「日本」ってどんな国？』ちくまプリマー新書、２０２１年



「家族」「ジェンダー」「学校」「友達」「経済・仕事」など、身近な切り口から日本の姿を豊富な国際比較データで解説してくれる本です。大学に入る最初の勉強にちょうどいいと思いますよ。

☆柏木ハルコ『健康で文化的な最低限度の生活』小学館、２０１４年～（コミック、連載中）



役所の生活保護の部署で働くワーカーが主人公。ドラマ化もされた。貧困がたんなる「怠け」の結果ではないということが、様々なケースから見えてくる。合わせて、飯島裕子『貧困女子』（岩波書店、2016 年）も。

☆川上量生『鈴木さんにも分かるネットの未来』岩波新書、２０１５年

「ソーシャル・メディア」の名のもと、良くも悪くもすっかり大衆化した現在のインターネットの功罪を、ビジネスとの接触面からクールに論じている。



☆牧野百恵『ジェンダー格差――実証経済学は何を語るか』中公新書、２０２３年

最新の実証経済学の研究成果を平易に紹介し、ジェンダー格差を「思い込み」ではなくエビデンスから捉え直す良書。2024 年サントリー学芸賞（政治・経済部門）受賞作。



☆神原文子ほか編『よくわかる現代家族［第２版］』ミネルヴァ書房、２０１６年

家族論に関連する様々な事象や制度について、各 2 ページで紹介したものである。家族問題に関連する幅広い知識が理解できるとともに、家族という身近な関係について歴史、制度、意識などから考えることのできる良書である。



☆藤原辰史『食べること考えること』共和国、２０１４年

人間は食べることなしには生きられない。本書は、食べ物の生産という視角から現代社会を論じたエッセイ集である。台所、フードコート、牛乳など、食が紡ぐ物語は、私たちの現在地を映し出す。社会への想像力が掻き立てられる。



☆クライン，ナオミ『これがすべてを変える――資本主義 VS. 気候変動』上・下、岩波書店、２０１７年



人類の生存を脅かす地球温暖化とグローバル資本主義の関係を世界各地の取材をもとにジャーナリスト、ナオミ・クラインが鋭く、わかりやすく、壮大に切りこむ。

☆若林幹夫『郊外の社会学』ちくま新書、２００７年



東京の郊外で生まれ育った著者が、自分の経験と社会学的分析を交差させて、郊外地域や都市社会の歴史と特徴を分析しています。